

ワイマール期プロレタリア演劇の日本受容：K. A. ウィットフォーゲルの作品を中心に

冷戦体制が崩壊して四半世紀を経た今日の我々にとって、マルクス主義の支配的イデオロギーとしての正当性は、完全に失われたどころか、その理論体系自体の妥当性すら疑問に晒されていることは、周知の事実である。だが、ソヴィエト連邦が樹立された直後の時期においては、革命に身を投じる人々にとって、マルクス主義は唯一正確な世界観学（Weltanschauungslehre）であり、人間のあらゆる行動、理論研鑽、文学的営み、生活様式に至るまで、指導的な地位を有する思想にほかならなかった。そのため、初期無産運動を担った知識人たちの多くは、特定の学問領域のみに専心するのではなく、経済理論や社会思想から文学・芸術に及ぶ、あらゆる知識に通暁していた。ドイツ共産党機関誌『Die rote Fahne』の文芸欄（Feuilleton）の編集を担当していた K. A. ウィットフォーゲル（1896-1988）もそのような知識人の一人であり、1920年代を通じて、一連の新興演劇作品を発表するほか、カントやヘーゲルの美学理論を駆使しながら、ワイマール末期におけるマルクス主義的美学をめぐる論争に大きな影響を与えた。日本では、1926年9月末、彼が1923年にマリック出版社から刊行した脚本に基づく風刺劇「誰が一番馬鹿か？」（三幕四場）が東京築地小劇場で上演され、脚光を浴びることになった。1920年代半ばから30年代初頭にかけて、辻恒彦、川口浩などのドイツ文学者をはじめとする左翼文筆家や文芸理論家の翻訳・紹介により、彼の脚本作品4点、文学・美学理論作〔論文？〕10点までが公にされたことや、1931年に結成されたプロレタリア文化連盟（コップ）の名誉協議員に彼が推されていたことからみて、昭和初期の日本プロレタリア文学運動の中で、ウィットフォーゲルの作品と理論が及ぼした影響力は無視できないものがあったと思われる。ところが、これまで1920年代の日本の左翼文学に注目した研究の多くは、言語の壁によって分断されている一国史の枠組みを前提に進められていたため、プロレタリア文学の展開におけるトランスナショナルな要素を見落としてきたと言わざるをえない。他方、ウィットフォーゲルの学問的営為を取り上げた研究は、ごくまれな例外（Gallas, 1971; Ulmen, 1978）を除くと、ほとんどが、物議を醸した彼のアジア社会論に集中しており、日本の文学青年たちによる左翼文学運動における受容のあり方の解明どころか、急進的なプロレタリア演劇作家としての彼の業績の実相さえ、現状では手つかずのままとなっている。

本稿では、日本におけるウィットフォーゲルの劇作・文芸理論の受容史を取り上げ、まず、誰が、どのような目的をもって、いかなるルートを通じて、彼の作品を日本に紹介したかを、歴史的に考証する作業を行なっている。そして、日本における、それらテキストがもたらした反響、惹起した論争を整理することにより、ウィットフォーゲルのテキストが言語的・社会的コンテクストの変化の中で果たした新たな機能を検証している。